

POPULAR BOOKS



著者の
諒解により
検印廃止

昭和39年1月25日 発行

変人島風物誌

著作者 多岐川 恭

発行者 矢貴東 司

印刷者 小泉輝 章

発行所 株式会社 桃源社

¥290.

東京都中央区日本橋蛸蛸町1—12

電話 (671) 4001～2番

振替 東京 64351 番

落丁・乱丁の跡はお取替え致します

1964 ©

変人島風物誌

多岐川 恭



ポピュラー・ブックス

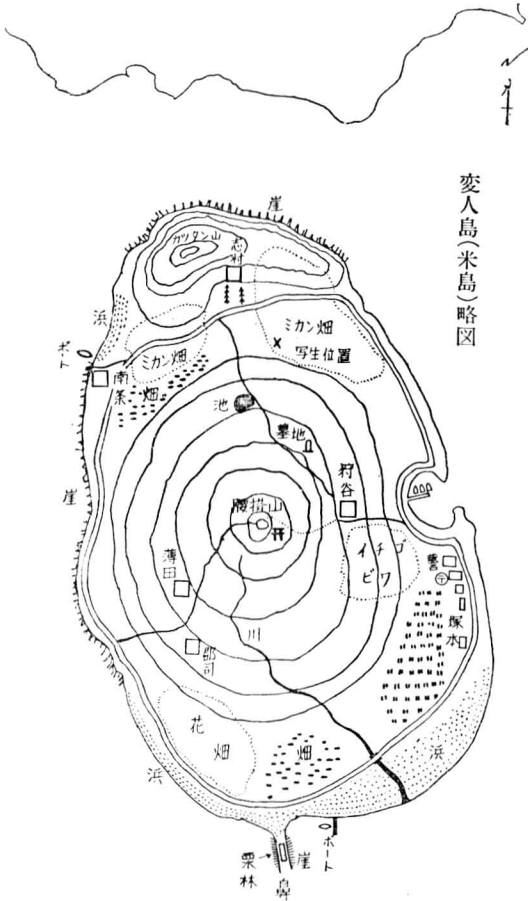
目次

退屈な地誌	七
住人たち	一四
自己紹介	四三
一人目が死ぬ	六一
捜査と一応の結論	六六
検討	九四
腰掛山から	一五
二人目が死ぬ	一四〇
他殺のデータ	一五八
ロマンスと私	一八四
三人目が死ぬ	二二
崖の下の結末	三二

装幀 長尾みのる

変人島風物誌

変人島(米島)略図



退屈な地誌

まず、地図を見ていただきます。ほんのメモ程度に書いた、不正確な略図に過ぎないのですが、これでも大体のところはおわかりになるでしょう。この小さな島の正確な地図など、ありません。

変人島……と対岸の住民からは呼ばれていますが、本当の名は米島。図をご覧になればおわかりのように、米粒の形をしているからです。変人島という仇名がついたのは、せいぜい十数年前からで、理由は、島に住む少数の人々が、みな変り者だからのことです。これについては次の章で述べます。実地にはかったことはありませんが、島の周囲は約三キロ、ほぼ海岸線に沿った道を一巡すると、ぶらぶら歩いて三十分ほどかかります。東西は五百メートル強、南北は約八百メートルとしておきましょう。

まったく小じんまりした島です。どこにあるかということは、詳しくはお教えできません。というのは、私はこの変人島を愛しているからです。あの時のままにしておきたいのが、私の願いです。い

までこそ私は、なつかしい島を離れ、東京の近くの病院に住んでいます、きっと、いつの日か、また島に戻る日がくるでしょう。私はそこで、当時生きていた、または住んでいた変人たちをしのびながら、静かに、すぐれた風光を楽しみながら一生を終りたいのです。

島の所在がわかってしまえば、金持だの、観光客だの、商売人どもが、ワッと押しかけてくるでしょう。そして、忘れられた、おだやかな島の空気をむちゃくちゃにしてしまうでしょう。なにしろ、日本には人が多過ぎるうえに、気ぜわしい……楽しむことにも気ぜわしい連中ばかりがそろっていませんからね。

しかし、殺人事件が三件もあった土地だから、新聞に出ているはずじゃないかとおっしゃるのでしよう。たしかに出ました。地方紙や、大新聞の地方版に。

一度に三人も殺されたのなら、大事件です。中央紙の社会面のトップにのるでしょう。そして、わが変人島は、大々的に世間に紹介されるでしょう。

実際には、三つの殺人事件は、かなりの時日を置いて、離れ離れに起りました。解決にも時間がかかりましたし、センセイショナルでもありませんでした。従って、事件全体が、ニュースヴァリュエのある「殺し」としては盛り上らなかったのです。

地方紙は二段みだし以上は使いませんでしたし、中央紙の地方版に至っては、みな一段で済ませて

しまいました。

だから、大方の人は、変人島の存在など知りません。私が正確な所在地をお伝えしたくない気持は、これでおわかりと思います。

変人島——米島は、瀬戸内海に浮かぶ無数の島々のうちの一つです。中国地方の瀬戸内沿岸に大へん近いのですが、惜しいことに、と言うより、幸運なことに、ある大きな島の陰になってしまっています。沿岸からは、変人島は見えないのです。年少の住民のなかには、そんな島のあることさえ、知らない者がいるかもしれません。

大勢の人々のなかで、ちっとも目立たない人間、いるかいなかかわからないような人間がいるものです。私もそういう人間の一人ですが、島を人間たちにたとえるなら、変人島がちょうど、それだと言えるでしょう。そんな理由からも、私は変人島を好んでいます。

お前はどこの病院にいるんだって？ いや、そんなことは、この物語には関係のないことでしょ。う。ずいぶん長くかかりそうな病気だなんて？ まあ、その通りでしょう。長期の治療を要する病気も、いろいろありますからね。

さて、いろいろと横道に入りましたが、変人島の地誌を、ザッと述べてみましょう。

島の中央にあるのが腰掛山。妙な名ですが、太古、イザナギノミコトが、国作りの最中に、この山

に腰をかけて一服したという、変人島にしてはえらく壮大な伝説がその由来です。標高は、せいぜい二百メートル足らずだと思われませんが、頂上からの景観は、すばらしいものです。白い波にふちどられてゐる島全体が、一望のうちにおさめられるほか、大小さまざまの島が、清麗せいれいきわまりない海のかなかに浮かんでゐます。なお、頂上近くに、島の氏神様があり、小さい祠ながら、神々しく古びてゐます。境内には赤い鳥居のたくさんあるお稲荷いなりさんも祭つてあります。

それから少しくだったところに、海に向かつてお墓がいくつか立っています。主として地主さんの祖先のお墓ですが、正徳年間に建てられたのが一番古いようでしたから、それ以前には無人の島だったかもしれません。

山がもう一つ。北端にあるカッタン山です。どうしてカッタン山というのか、いろいろ調べてみましたが、わかりません。カッタイ山のなまりではないかと思ひますが、どうでしょうか。

言い忘れましたが、元来この島は、カッタイ坊……レプラ患者の住んだ島だとか、罪人が移住した島だとかいった言い伝えがあるので、他の土地の者は、近付きたがらないのです。現在はそんなこともありませんが、それでも、あの島にはマムシがうようよしていると信じている子供たちを私は知っています。

ふもとからカッタン山を見ると、ちょうどカタツムリのように見えます。西のほうが殻に当る部分

で、山の横腹を縫っている小道が渦巻に当たります。頂上は、腰掛山よりかなり低く、北側は海に向かって断崖をなしています。東のほうはカタツムリの体で、細長い丘陵をなし、山肌一面から、裾の平地にかけて、ミカン畑になっています。ミカン畑はこのほか、西岸近くの山ろくから裾野にかけてもあります。

小川が一つ、腰掛山の南側から湧き出して、東南の海にそそいでます。ほんの一飛びで渡れるくらいの川ですが、それでも海岸近くになると水量もふえ、小舟でくだることもできます。私は河口付近でハゼや小鯛を釣っていました……釣りと言えば、腰掛山の北側にある池でフナも釣りましたが、まあそんな余計な話はよしにしましょう。

次に海岸線の説明に移ります。

カッタン山の北側一帯は、さきに言いましたように、断崖です。頂上から下を見ると、波が泡立って、黒い岩にぶつかっています。波で地肌がえぐられているので、眺めおろしても下のほうは見えません。比較的低い、東側の丘陵のところでも、崖は水面まで十メートルくらいあるでしょう。

ほかに崖のあるところは、西岸の中央部一帯で、これは南下するに従って低くなり、砂浜に続いています。

東岸の中央部に入江があります。もう少し大きければ、天然の良港というところでしょうが、ちょ

つと大きな船になると、もう入りません。水面は文字通り鏡のようで、何隻かの漁船、それにボートが、木製の棧橋さんばしにつながれています。出入する最大の船と言えば、週に一回、中国地方のある港から五十トンくらいの船がやってくるくらいのもので、この船は、島ではありつけない肉類その他の食料品、カンヰメ類、日用雑貨などを運び、帰りに島の特産品を積んで帰ります。

特産品は、さっきのミカンが第一。氣候がよいせいか、大きくて甘いミカンです。ミカンの季節でない頃は、イチゴとビワ。イチゴとビワの畑は、入江からちよつと上ったところから、腰掛山のふもとまで、かなりの地面を占めています。

もう一つ、特産で忘れてはならないのが、花です。厳冬、盛夏以外は、あらゆる種類の花を栽培さいばいできますが、チューリップ、ダリア、百合、除虫菊じちゅうきくなどが主なものでしょう。花畑は島の南西にあります。

入江からすぐ南の一角が、島の中心といえば中心で、ここに駐在所や簡易郵便局があります。それに八百屋、魚屋、雜貨屋。私の住んでいた家も、南の外れにあります。こまかいことは、次の「住人たち」の章で説明しましょう。

それから南へ、きれいな弧状の海岸線。広い砂浜がずっと続いています。浜は広くて清潔で、日陰になる松林もあり、遠浅の上に波は静かなので、海水浴にはもってこいですが、まず、いつ行ってみ

でも人影はありません。

浜から道に戻って、橋を渡り、さらに南へ行きましょう。道の右側は田んぼだったのが、だんだん野菜畑に代ります。やがて、南端に突き出した半島が見えてきます。簡単に『鼻』と呼ばれているところで、このあたりが景色としては一番いいでしょう。その岸は岩が多く、波がしぶきをあげています。漁師の船は、岸近くまでは行きますが、それから先へは近寄れないのです。

半島の先端に近く、白い家が色どりをそえています。これは……いや、このことも次の章でいきましょう。ここでは、道から半島を眺めるだけにします。

砂浜の幅はかなりせまくなって、それでも道と半島の間を帯になって横断し、ずっと南西に続き、西岸の崖が高まるところで、やっと消えています。

さあ、これが、米島……一名変人島のごく大ざっぱな地誌です。なお付け加えるならば、全島に樹木が繁茂し、松、杉、かし、しい、などが目立ち、未耕の土地が多くて、笹藪がたくさんあります。これは人手が少ないからなのです。

天気の良い日が多く、風も強くは吹きません。全く無風の時もあります。夏は暑くなく、冬は……そうですね。五年に一度くらいは雪が降りますか。あの事件の時も、珍らしく雪降りのあったあとでしたが……。

住人たち

住人のことをお話するとしたら、まず地主さんから始めるべきでしょう。変人第一号です。次にその家族と雇い人たち。

それから、おのおの家を城として立てこもっている借地人たち。あとは駐在巡査や、少ない住民相手の商売人たちです。私自身のこととは章を改ためましょう。これらの人々を、一応、生きてピンピンしているものとして、ご紹介しますが、いまでは、このうちの五人が死んでいるのです。

地主の狩谷初太郎は、当時三十六才。骨太の、頑丈な体格の男で、高い鼻、頬骨、太い眉とすると目を持った顔は、男性的な美貌と言ってもさしつかえないでしょう。

私は彼の褐色に日焼けした顔がほころびたのを、見たことがあります。ポーカー・フェイスというのでしょうか、表情を少しも動かさず、いつも古びたハンチングに古びた背広で、銃を肩にかついで、島内を歩きまわっています。顔見知り……島の住人はみな顔見知りのはずですが……に会っても、ジロリと一べつするだけで、言葉をかけるどころか、会釈さえしません。

鳥の撃ち方にしても、彼は木にとまっている鳥は撃とうとせず、パッと空に飛び立ったところを、または島から島へ渡って行く鳥を撃つのです。だから、常に空に向かって散弾を撃ち上げていることになります。腕はどちらかと言えば未熟のほうで、鳥に当ることのほうが少なかったと思いますが、当っても当らなくても表情を変えません。それでは、鳥撃ちなどはほんの退屈しのぎで、どうでもいいのかといえば、ほとんど毎日、飽きもせずに歩き回っているところから見ると、やはり好きは好きなのでしょう。

獺よりも、撃つことそのものが好きかもしれません。邸内に簡単な射撃場を作っていて、気が向けば、そこで拳銃の練習をするのです。人の話では、大ていのを外れるそうですが、当人は例によって、面白くもなさそうな様子で射撃を続けるということですよ。

初太郎は島の住人から好かれていません。理由は簡単で、徹底的にケチだからです。業つくばりというやつです。噂では、雇人たちは雀の涙ほどの給金で、田畑から花畑、果樹園の世話までさせられているらしく、雇人たちが、短時日のうちに、目まぐるしく入れ替るのが、その証拠でしょう。果物の取入れは、臨時に手伝いを頼んでやらせますが、箱やカゴにつめて、船に積むまでの重労働で、その割にはひどく薄給のようです。お礼に、いくらかミカンをわけてやるというようなことは、絶対にしません。雇人にしても、勝手にミカンをもいでいるところを見つけれでもしようなものなら、たち